

守るのは花とまちの未来！ ～アポイ岳ジオパークの取組み～

様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会 田村裕之

1. 岩と花をめぐる旅、様似町！

(1) 様似町ってどこだろう？

「アポイ岳」と聞けば、わかる方は多いかもしれませんが。特に最近では登山ブーム、アウトドアブームです。結構専門雑誌などで紹介されていますので、アポイ岳の名前を見られている方は多いかと思えます。一方で「様似町」と聞いたら、どこにあるのかわかる方は…決して多くはない…もっと言うと札幌圏の方の6割は知らないのではないかという感触があります。そう、ユネスコ世界ジオパークのまちであるアポイ岳ジオパークのまち様似町は、意外(?)にマイナーなまちなのです。

様似町は、日高管内の南側に位置し、北の日高山脈と南の太平洋に囲まれたまちです。豊かな海、太平洋の影響もあり、夏涼しく、冬は温暖で雪が少なく暮らしやすいこのまちでは、海の恵みである秋鮭、昆布、山の恵みであるイチゴ、米、山菜類など山海の珍味が楽しめるまちでもあります。しかし、私たちのまちを最も特徴づけているのは、まちの東側にそびえるアポイ岳です。



図-1 アポイ岳ジオパークの位置図

(2) アポイ岳ってどんなところなんだろう？

アポイ岳は、北側のピンネシリ岳とともに“アポイ山塊”を成し、日高山脈の支脈を形成しています。この山塊は、北米プレートとユーラシアプレートが衝突して北海道や日高山脈が成り立つ際に、その衝撃が地殻を越えて、地下数十kmにある上部マントルにまで到達し、その一部を剥ぎ取り、上昇させ、地表に突き上げられることによりできたものです。この山塊を構成する物質の多くは、火星にも調査の手を到達させている人類が、いまだ到達していない上部マントルを構成する「かんらん岩」という岩石であり、世界的にも非常に貴重な山塊です。ここに咲く高山植物は、カンラン岩の超塩基性と夏場に日照を遮る海霧、冬場の少雪による低い地表温度などの過酷な環境によって、独特な植物群落を形成し、『アポイ岳高山植物群落』として国の特別天然記念物に指定されています。また、この他にも国の天然記念物に指定されている、国内ではアポイ岳にしか生息しない高山蝶「ヒメチャマダラセセリ」、太平洋や日高山脈、遠くは樽前山までも見えることのある眺望など、登山や植物・岩石愛好家のあこがれの山となっているのがアポイ岳です。

(3) みどころ満載のジオパーク！

アポイ岳から太平洋をのぞむと、海に突き出るような岬が見えます。様似町発祥の地ともいえるエンルム岬です。この岬は、昔は沖合にある大岩(島)であったところに、砂等が堆積して陸と繋がった“陸繋島”です。この天然の良港を利用して、江戸幕府が交易等を行う役所である「会所」を置くなど、この地域は北海道の中では古くから発展してきました。このエンルム岬と並ぶように海上に点在するのが、



図-2 アポイ岳に咲く高山植物



図-3 観音山に咲くカタクリと海に浮かぶ親子岩

ソビラ岩、そして夕陽の景勝地「親子岩」です。これらは1,700万年前頃に、太平洋プレートの沈み込みによって開いた地殻の中にマグマが入り込み、冷えて固まってできたものであり、これらの岩には北海道の先住民族であるアイヌの人たちの伝説も残されています。同じようにして形成された標高100mほどの「観音山」には、様似・伊達・厚岸に江戸幕府が建立した“蝦夷三官寺”と呼ばれるお寺の一つである等瀨院の住職が設置した観音様の石像が並び、春に一面を覆うように咲くカタクリやエゾエンゴサク、オオバナノエンレイソウなどとともに、多くの方の目を楽しませています。

このように、アポイ岳ジオパークは、地質はもちろん、自然、歴史、文化など見どころがたくさんのできるジオパークなのです。

2. 大切なアポイ岳の花たちを守ろう！

(1) アポイの花たちの危機

アポイ岳の高山植物が国の特別天然記念物に指定された昭和27年(1952年)頃を知る人は、口々に「あの頃は、足の踏み場もないほど、一面花ばかりだった」「ヒダカソウだって、その辺に普通に咲いていた」と言います。しかし、60年以上経過した今では、ヒダカソウは登山道上ではほとんど見られなくなり、多くの花々も激減しています。その原因は気象変動による環境の変化、ハイマツの増加、エゾシカの食害、そして心無い人たちによる盗掘などと言われています。



図-4 アポイ岳に咲くヒダカソウ

(2) 動き出したアポイの花たちを守る活動

徐々に加速しているようにも思えるアポイ岳の高山植物の減少。このアポイ岳の現状を知った町内外の方々が集まり、平成9年に「アポイ岳ファンクラブ」が結成されました。ファンクラブは、地元の漁師、商店主、会社員を中心メンバーとして、盗掘を防ぐためのパトロールや、アポイ岳を訪れる研究者の支援や協力、講演会やシンポジウムの開催など、アポイ岳の自然を次世代に引き継いでいくために、献身的な活動を行ってきました。その活動の中で今、最も力を注いでいるのが静岡大学の増沢先生などに指導をいただき進める「アポイ・ドリームプロジェクト」です。この活動は、町内の中学校に協力いただき、生徒の自宅で高山植物の苗を育て、それをアポイ岳などへ移植する活動です。この活動は、全国的にも前例がない事業であり、手法等を毎回見直しながら進めていますが、この活動が生徒や家族のアポイへの愛着を育て、アポイを守る“後継者”

を育てることにもつながっています。実際に、事業実施後の中学生のアンケートには「最初は面倒だったけど、育つ姿を見ていて楽しかった」「また機会があったらやってみたい」という話もありました。



図-5 アポイ・ドリームプロジェクトの様子

一方、類似町では、アポイ岳に関わる様々な研究者を集めた『アポイ環境科学委員会』を組織し、科学的見地からアポイ岳の再生活動の方向性の検討を始めています。ヒダカソウの研究者、エゾシカの研究者、気象に関する研究者などが集まったこの委員会では、現時点では主に基礎データ収集や試験作業を中心に実施していますが、アポイ岳の高山植物再生に向けて、どの様な取り組みができるのか、アポイ岳にとって最も効果的で負荷のない再生手法とは何かについて議論を重ね、高山植物再生への道のりを検討しています。

官民をあげた再生への活動は始まったばかりですが、着実に前に進んでいます。



図-6 ハイマツ伐採試験の様子

3. “知る”ことが“守る”ことにつながる！

(1) 地元はかえって「灯台下暗し」？

本稿で、多くのアポイ岳ジオパークの魅力や活動について述べさせていただいたところですが、これを町内の全ての方が共通理解として認識しているわけではありません。どこの地域も同じでしょうが、身近にあるものの魅力・活動というのはかえって見えにくい『灯台下暗し』の状態なのかもしれません。例えば全国的にも有名なアポイ岳にしても、類似に昔から暮らす方には「当たり前」に昔からある山「多少、花が有名な山」という程度の認識であり、本当にその価値を理解できているわけではありません。それは、前述のエンルム岬、親子岩…ひいては類似の地質、まちの価値についても同じことが言えるのかもしれませんが、近すぎると正しい価値判断ができないのは、この世の常なのかもしれません。

(2) 灯台の下を照らす活動

当ジオパークが、ジオパーク認定前から始めていたミニ講演会活動は、まさに「灯台の下」を照らすための活動だと言っても過言ではありません。研究者の方が考えている価値を、地元の方々が認識し、それを守り育て活動につなげる…それが狙いでした。研究者も、その価値を地元と共有できなければ、その『宝』を守ることはできない。一方で価値を知らない地元の方が集まっても、その『宝』を見出すことも守ることもできない。この両者をつなぐ活動が、ミニ講演会活動でした。実際に、アポイ岳ファンクラブの中核メンバーはこの活動の中で見出されてきた



図-7 ふるさとジオ塾の様子

ものです。当ジオパークでは現在でもこの活動に重点を置いており、考え方を受け継いだ形で『ふるさとジオ塾』としてを年間10回以上開催しています。この活動は、これまで88回開催し、延べ参加者数は2,682名となっており、知の財産形成に大いに役立っています。

(3) これからも守り続けるために！

このジオパークという活動や様似町というまちが今後の時代の趨勢に飲み込まれ、例えば消えることもあるかもしれません。しかし、この地域にある貴重な地質、植物、歴史などは、まちとともに消えるわけではありません。逆に考えると、どんなにまちが発展しようとも、これらの財産の価値を伝え、守る人がいないと貴重な財産も失われてしまいかねないのです。前述したふるさとジオ塾は、即、何かを解決できる活動ではないかもしれません。しかし、そのものの価値を知らなければ守る活動も始まりません。“知る”ことは守ることにつながります。そういった意味では、何かを守るための「種まき」のような活動かも知れません。この活動が、きっと次の世代で芽吹き、より大きな活動へとつながると思います。

4. おわりに

今年10月に、当ジオパークを主会場として日本ジオパーク全国大会が開催されます。人口4,000人台のまちが、参加者600名以上の大会を開催しようとしていますので、会場や宿泊場所、移動手段など様々な制約があり、参加者のみなさんにもご迷惑をおかけする部分もあります。小規模なまちで、このような大規模な大会等を開催するには、相応のメリットとデメリットが伴うものです。参加者や周囲の方に絶大なPR効果は期待できる反面、対応によっては、悪い印象も与えかねません。ただ、私たちはこの全国大会開催を通じて求めるものは大きく二つだと考えています。一つは当ジオパークが進める前述のような活動を多くの方に発信し、他にはない魅力を感じていただきたいということ。そしてもう一つは、地元の方に当ジオパークの素晴らし



図-8 アポイ岳ジオパークの遠景

さ・楽しさを再認識いただきたいということです。全国から集まる参加者に当ジオパークを楽しんでもらえるようプログラム開発等を行うためには、自らの地域の楽しさを自らが知る必要があります。それを通して気づくものは多々あるのではないかと考えています。ある意味背伸びをして開催していると思われかねない“大いなるチャレンジ”である全国大会開催ですが、これを経て地元が得るものは経済的波及効果だけではない！…と考えています。

ましてや、ジオパークは自然や観光、教育、産業などを複合的につなげて、地域の振興を図ろうとするものです。私たちが、この素晴らしい自然を舞台に進めている保護活動や教育活動は、その対象となる財産を守るだけでなく、私たちの地域を守ることにもつながるものなのです。

本稿をお読みいただいたみなさまも、当ジオパークの冒険的チャレンジを見守りいただくとともに、ぜひ、一度足をお運びいただき、アポイ岳ジオパークの魅力発掘にご協力いただければと思います。

お待ちしております！

田村 裕之 (たむら ひろゆき)

アポイ岳ジオパーク推進協議会

事務局
(様似町商工観光課主幹)

